

2013年05月17日

2012年度採択 研究の国際化推進プログラム 研究成果報告書

採択者 (研究代表者)	所属機関・職名：先端総合学術研究科・教授 氏名：西 成彦
研究課題	生存学の国際化に向けた学術成果の整備と情報発信体制の構築

I. 国際的研究成果発信の目的・意義の概要

今次の国際的研究成果発信の目的・意義について、概要を記入してください。

成果発信の目的

申請者が所属長を兼務する生存学研究センター（以下、センターと表記）は、2012年3月で終了したGCOEプログラム「生存学」創成拠点の活動成果の継承とさらなる発展・展開を責務とする本学独自の高度学術研究機関として2012年4月より発足した。そのセンターの目的が、研究の質のさらなる向上と研究成果の成果のより広範な国際的発信にあることは言をまたず、それを遂行する諸活動にかかわる諸経費が不可欠となる。経費の内容は当該活動を推進する人々に支払われる謝金であるが、そのさいの人的体制はGCOE時代に築いた基盤のうえにさらにそれを強化するかたちですでに準備されている。

成果発信の意義

センターでは、①「生存の現代史」、②「生存のエスノグラフィー」、③「生存をめぐる制度・政策」、④「生存をめぐる科学・技術」の4つを学術的課題として掲げている。これはGCOE時代の研究課題の発展的継承を期してのみならず、学としてのさらなる国際展開を補完強化するために刷新されたものである。本センターの特色と独自性は、「障害・老い・病気・異なり」といった多様な身体の状態を有する人々の生の様式・技法について知り、そのありうるべき生き方と社会のあり方（制度・政策・価値規範）を構想し実現するための手立てを提示するという共通課題に、領域横断的にかつ集中的に取り組む点にある。リニューアルの目的は、既刊のセンターの報告書の改訂増刷を含めてこれまで生存学がはたしてきた類例のないアウトリーチ機能のさらなる強化とともに、生存学の諸成果を、隣接する諸学とより有機的・緊密に接合することにある。センターがこれまで蓄積してきた国際的にも独創性の高い研究内容を発信し、複数の国外研究拠点との連携と交流を促進することは学術的に大きな意義があり、生存学及び立命館大学のグローバルなプレゼンスの向上という点でも意義は大きい。

II. 国際的研究成果発信の成果と今後の展開計画の概要

今次の国際的研究成果発信で得られた成果と今後の展開計画について、概要を記入してください。

主な成果

- 1) 多言語 HP については、英語と韓国語の充実に取り組んだ。メールマガジンについては、英語のメールマガジンを12号(83号～94号)、韓国語のメールマガジンを5号(27号～31号)配信した。
- 2) 英文ウェブ学術ジャーナル *Ars Vivendi Journal* について、特集「多元的統合感覚と生・美の諸相」とした第3号、特集「障害学」とした第4号を刊行した。
- 3) 2012年11月に韓国・ソウルにおいて韓国障害学研究会と共催で障害学国際セミナー2012を開催した。セミナーの成果については日本語・韓国語の論文を掲載した川端美季・吉田幸恵・李旭編『障害学国際セミナー2012——日本と韓国における障害と病をめぐる議論』生存学研究センター報告第20号を刊行し、同内容をHPにも掲載した。ほか、ベルガモ大学の研究者との国際ワークショップ、テグ自立生活センターとの国際交流企画をおこなった。

今後の展開計画

英語 HP のさらなる充実とメールマガジンの読者拡大を目指すとともに、共同研究や実践的交流に取り組む。韓国語 HP のさらなる充実とメールマガジン発信、定期的な国際プログラムを継続し、組織間連携につとめる。